

発達障碍児のロールシャッハ反応の縦断的研究

天満 翔¹⁾・日高 三喜夫²⁾

要約

本研究では、発達障碍児のロールシャッハ・テスト上の縦断的变化を明らかにすることを目的として研究を行った。年齢は、天満・日高(2015)の際に医師により診断された小学生及び中学生33名のうち、通院継続中で診断名に変更のない2回分の資料が揃った15名(AD/HD群8名, ASD群7名)である。天満・日高(2015)の平均年齢が10.07歳($SD=2.05$)であったのに対して、今回は12.93歳($SD=2.19$)であった。ロールシャッハ・テストを個別で実施し、片口式で施行した。結果は、天満・日高(2015)のデータとWilcoxonの符号化順位検定(Wilcoxon signed rank test)によって検討した。差が見られた値は、AD/HD群に関しては、 $\Sigma F+%$ や $R+%$ などの形態水準が高い値を示した。ASD群に関しては、全体反応が高い値を示したのに対して部分反応が低い値を示し、また、平凡反応が高い値を示した。

キーワード：発達障碍、縦断的研究、青年期

1. 問題

1. 発達障碍児のロールシャッハ・テストについて

注意欠如多動症(以下、AD/HDと略記)や自閉スペクトラム症(以下、ASDと略記)などをアセスメントするものの1つとして、従来は知能検査が多く用いられてきた。しかし、構造化された知能検査はあくまでも認知機能を測るものであり、発達障碍者の持つ特性の多くが対人関係場面で明らかになることから、近年ではロールシャッハ・テスト(以下、ロ・テストと略記)を用いた研究が多く発表されている。辻井・内田(1999)は、広汎性発達障碍者(以下、PDDと略記)30名($M=18.2$ 歳, $SD=4.38$)を対象とし、反応数の少なさ、全体反応の高さと部分反応の低さ、形態反応の多さ、動物運動反応や人間運動反応の少なさ、形態水準の著しい低さ、反応内容の幼さと狭さ、平凡反応の少なさ、色彩形態反応や形態色彩反応などの色彩反応の少なさの特徴として挙げている。さらに、内田ら

(2012)は、質問段階におけるASDのコミュニケーションの問題について分析し、説明を拒否すること、反応の確信・実感を主張すること、反応の知覚理由でなく反応概念を説明すること、説明しているうちに反応概念がズレてしまうこと、不釣り合いな認知の5つの特徴を挙げている。

そこで、筆者ら(天満・日高, 2015)は本研究に先立ち、本来支援や療育の見立てが必要とされる学童期を中心とした発達障碍児33名(AD/HD18名 PDD15名, $M=10.55$ 歳 $SD=1.92$)と小川・松本(2005)の定型発達群(以下、NT群と略記)の各ロ・テスト変数の量的な検討を行った。その結果、初発反応時間の長さ、部分反応の多さ、形態反応の多さ、色彩反応の多さ、反応内容の狭さが発達障碍群全体の特徴として見出された。AD/HD群とPDD群の比較では有意差が見出せなかったが、行動質問表との相関では、AD/HD傾向では初発反応時間が短くなること、PDD傾向では色彩形態反応が高くなることが明らかとなった。

1) 久留米大学比較文化研究所

2) 久留米大学文学部

2. ロ・テストを用いた縦断的研究

このような学童期の性格・行動特徴がいかに変化するかという同一個人内に生ずるパーソナリティの変化と一貫性に関する問題は、ロ・テストに限らず発達研究に携わる者の大きな関心事の一つである。

小川・松本(2005)では、幼稚園生から中学生まで及ぶ広範囲にわたるNT群の各ロ・テスト変数の横断的研究を行っている。その中で、反応領域の割合に関しては全体反応、部分反応、特殊部分反応の順に高い値を示し、年齢による有意差が認められないこと、反応決定因に関しては形態反応は成長と共に減少し、形態水準、人間運動反応、動物運動反応は増加すること、色彩反応では変化がみられないこと、反応内容に関しては反応内容の種類や人間反応が成長と共に増加することを示している。これらの特徴は、野沢・清水(1969)や小沢・片口(1970)など小川・松本(2005)の研究以前の子どもを対象としたロ・テストの基礎となる研究でも、ほぼ同様の特徴を示している。

一方で、ロ・テストを用いた縦断的研究は事例研究を除いてあまり多くは見られない。NT群を対象としたものでは、Amesら(1974/1976)は各変数ともに2歳から10歳までは変化を示し、10歳から16歳までは直線的ではあるがその変化が少ないとしている。また、大野(1984)は、同一個人内における縦断的研究として15名の対象者の6歳、11歳、18歳のロールシャッハ反応を分析し、学童期から青年期への量的変化を検討している。その中で、ロ・テスト解釈上主要な変数のうち7つの変数(M, FM, M%, CF, sh%, F+, ΣF+)において全員の得点が一定の割合で増加し、4つの変数(D%, F, F%, A%)において全員の得点が一定の割合で減少し、学童期は得点の変化の方向と量に個人差が大きく、青年期以降には個人の反応様式のみでなく得点までも予測できるほどの高い予測性があることを指摘している。

3. 本研究の目的

このようなNT群を対象としてAmesら(1974/1976)や大野(1984)が縦断的に行った先行研究では、共通してロ・テストの学童期における変化の多様性や個人差を指摘している。しかし、発達障碍児の能力のアンバランスさを考慮すると、NT群を対象とした先行研究の結果をそのまま当てはめて考察することは難しい。TATや知能検査と異なり、ロ・テストでは老若男女問わず同一図版を用いることによって言語面での発達の変化や非言語的なコミュニケーションの縦断的变化を探ることに大きなメリットがあるものと思われる。そこで、本研究の目的は、AD/HD及びASDを対象者とした各ロ・テスト変数の同一個人内の差と変化の方向性を検討することで、限られた参加者の中で限定的ではあるがそれぞれの群にみられる縦断的な変化の様相を探索的に明らかにすることである。

II. 方法

1. 対象者

対象者は、天満・日高(2015)の際に医師により診断された小学生及び中学生33名のうち、通院継続中で2回分の資料が揃った15名(AD/HD群8名(男児7名, 女児1名), ASD群7名(男児6名, 女児1名))である(表1)。

診断については天満・日高(2015)ではDSM-IV-TRに基づき、本研究ではDSM-5に基づいている。辻井・内田(1999)では高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群のロ・テスト上に差がみられないことから両者をPDD群としたことを踏まえ、天満・日高(2015)も両者をPDD群という形で全体を対象にした。DSMの改定により本研究と同様に両者をカテゴリーによる区別ではなく連続的な総体として捉えるようになったことから、本研究のASD群に関しては診断名が変更されているが、縦断的検討を行うにあたって

表1 参加者の概要

	AD/HD				ASD			
	M	SD	Min-Max		M	SD	Min-Max	
ロールシャッハテスト実施年齢								
Pre	10.25	1.83	8	13	9.86	2.41	7	14
Post	13.88	1.81	11	16	13.57	2.70	10	18
インターバル期間	3.04	0.26			3.12	0.45		
WISC-IV実施年齢	13.13	1.55			12.71	2.87		
IQ	92.13	7.41	85	105	98.57	13.88	81	121
※通院期間	3.63	0.74			4.07	1.13		

※中断期間を除く通算年数

天満・日高 (2015) における PDD 群と同質の集団であるとした。

め、座席の配置、時間の測定、子どもとの関係などいくつかの点で変更を行った (天満・日高, 2015を参照)。

2. 検査の実施と倫理上の配慮

ロ・テストの実施にあたり、その主旨および方法について文書と口頭で本人と保護者に説明を行い、同意が得られた限りにおいて、主治医の判断のもとに実施した。くわえて、実施前に承諾が得られても、実施中および実施後にその同意を撤回できることを説明し、論文の作成と発表に際しても同意書を元に病院側と保護者に承諾を得て行うこととした。スコアリングと解釈については片口法 (片口, 1987) に準拠して行ったが、実施に際しては、天満・日高 (2015) と同一条件にするた

III. 結果

統計解析を行うにあたり、各ロ・テスト変数は正規分布をなさない頻度データが多く含まれるため、パラメトリックな統計量ではなくノンパラメトリックな統計量を示すことが重要である。そこで今回は、各ロ・テスト指標の pre データと post データにおける記述統計量を算出し、同一個人内の差と変化の方向性について、それぞれ Wilcoxon の符号化順位検定 (T) と優越確率 (Ps_{dep}) を求めた。その結果を表 2 に示す。なお、

表 2 AD/HD 群と ASD 群のロールシャッハ・テスト変数の変化

	小川・松本 (2005)				AD/HD							ASD						
	pre		post		pre		post		T	p	Ps_{dep}	pre		post		T	p	Ps_{dep}
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD				Mean	SD	Mean	SD			
R	17.52	7.76	18.30	7.67	20.25	4.03	22.75	8.63	11.50	.36	.63	20.43	5.86	20.57	6.60	10.00	.92	.43
R ₁ T(Av.)	17.38	12.63	23.70	18.50	21.13	6.47	16.91	14.14	16.00	.78	.38	27.31	13.10	24.27	11.07	13.00	.87	.71
R ₁ T(Av.N.C)	15.54	12.51	20.72	15.51	24.13	10.96	14.86	10.68	13.00	.48	.38	26.97	12.51	25.14	9.16	14.00	1.00	.57
R ₁ T(Av.C.C)	19.22	14.56	26.15	23.80	18.13	7.49	18.68	17.38	15.00	.67	.38	27.66	14.60	23.16	17.46	12.00	.74	.43
W%	47.30	21.60	51.10	18.70	49.84	14.76	45.59	20.39	8.00	.16	.25	32.78	9.84	52.66	18.05	.00	.02*	1.00
D%	38.20	17.90	39.10	16.60	38.80	21.18	35.68	24.24	9.00	.21	.75	50.37	10.14	34.13	17.35	1.00	.03*	.86
Dd%	14.50	13.90	9.80	10.60	7.58	8.40	16.67	8.77	9.00	.21	.75	12.62	6.87	12.75	6.77	14.00	1.00	.43
S%	1.70	1.40	2.20	1.60	3.78	6.78	2.07	1.97	5.00	.50	.63	4.22	6.66	.46	1.22	.00	.11	.57
D.R					4.25	1.16	4.20	.84	4.50	.42	.50	4.00	1.53	5.71	2.06	.00	.07+	1.00
F%	74.16	17.56	60.65	20.04	73.30	13.57	82.11	6.28	10.00	.26	.75	71.42	14.96	68.81	11.24	10.00	.92	.86
M	.98	1.46	1.72	1.69	.50	.53	.20	.45	4.00	.72	.63	.57	.79	1.14	1.07	2.50	.36	.86
FM	1.68	2.00	1.90	1.76	2.00	1.77	1.00	.71	10.00	.50	.63	2.43	2.37	1.71	.95	10.00	.92	.57
m	.47	.72	.73	1.06	.38	.69	1.00	1.06	1.50	.11	.88	.43	.61	.71	.70	2.00	.27	.86
FC	.47	.71	1.13	1.49	1.06	1.02	.60	.89	7.00	.24	.50	.71	.76	.43	.79	5.00	.50	.57
CF	.43	.77	.90	1.12	.56	.50	.60	.55	8.00	.60	.50	.79	1.15	.93	.93	4.00	.72	.71
C					.00	.00	.00	.00	-	-	-	.14	.38	.00	.00	.00	.32	.86
ΣC	.67	.95	1.64	1.59	1.09	.68	.90	.55	2.50	.18	.50	1.36	1.73	1.14	1.11	6.00	.69	.57
C'	.53	.87	.82	1.11	.69	.70	.40	.55	5.00	.50	.50	.71	.76	1.07	1.06	4.50	.42	.71
VIII+IX+X/R%	31.01	6.93	31.24	7.93	32.49	8.04	28.69	9.53	12.00	.40	.38	33.53	8.99	28.04	9.85	6.00	.18	.43
F+%					61.70	4.60	64.79	3.56	3.00	.04*	.75	61.28	9.64	64.47	12.15	4.00	.17	.71
ΣF+%					61.42	4.35	66.87	4.67	.00	.01**	1.00	60.41	9.43	65.18	7.23	7.00	.24	.71
R+%					58.83	4.06	63.06	5.63	.00	.01**	1.00	56.74	8.52	58.97	4.90	6.00	.18	.71
C.R	6.25	3.38	6.73	3.41	5.25	1.75	7.00	2.92	5.00	.25	.75	5.29	1.50	7.14	2.73	.00	.11	1.00
P					3.25	1.07	2.20	.84	7.00	.24	.38	2.64	.63	3.64	1.18	.00	.04*	1.00
A%	61.86	20.16	58.77	20.18	60.14	13.51	57.08	19.54	9.00	.21	.25	59.53	20.83	50.36	10.99	4.00	.09	.14
A	6.89	3.49	6.81	3.76	9.63	3.89	9.00	5.10	12.50	.44	.38	6.57	4.08	5.57	1.90	13.50	.93	.43
(A)	.44	.85	.66	.80	1.25	1.04	1.00	1.22	2.00	.14	.38	1.71	1.98	.57	1.13	3.00	.12	.29
Ad	2.87	2.24	2.22	2.67	1.38	1.30	4.40	3.65	4.00	.17	.75	3.43	3.05	2.14	1.57	1.50	.11	.43
(Ad)	.16	.49	.25	.60	.13	.35	.40	.55	.00	.11	1.00	.43	.79	1.57	1.81	.00	.07+	1.00
H%	16.13	12.00	19.64	12.05	20.51	10.91	16.51	15.34	14.00	.58	.63	16.71	16.06	19.50	6.85	11.00	.61	.57
H	1.15	1.18	1.71	1.45	1.50	1.31	.60	.89	5.00	.50	.50	1.29	1.38	1.57	1.27	4.00	.72	.71
(H)	.53	.77	.45	.82	.75	.89	.20	.45	.00	.07+	.50	.43	.79	.57	.79	.00	.11	.86
Hd	.85	1.20	1.14	1.35	1.88	1.36	2.40	2.30	6.50	.40	.75	1.29	1.11	1.43	1.27	13.00	.87	.43
(Hd)	.36	.73	.28	.59	.00	.00	.80	.84	.00	.07+	1.00	.14	.38	.43	.53	.00	.18	1.00
At%					2.68	3.02	4.85	3.92	3.00	.22	.75	.65	1.72	.71	1.89	1.00	.65	.86

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

NT 群に関しては天満・日高 (2015) と同様に、小川・松本 (2005) におけるそれぞれの近似値である年齢のロ・テスト変数を掲載した (pre $M=9.58$ 歳 ($SD=4.0$), post $M=14.17$ 歳 ($SD=5.0$))。

pre データと比較して差が見られた値は、まず AD/HD 群に関しては形態水準 ($F+ \% : T=3.00$ ($p<.05$) $Ps_{dep}=.75$, $\Sigma F+ \% : T=.00$ ($p<.01$) $Ps_{dep}=1.00$, $R+ \% : T=.00$ ($p<.01$) $Ps_{dep}=1.00$) が高い値を示した。次に ASD 群に関しては、全体反応 ($W \% : T=.00$ ($p<.05$) $Ps_{dep}=1.00$) が高い値を示したのに対して部分反応 ($D \% : T=1.00$ ($p<.05$) $Ps_{dep}=.86$) が低い値を示し、また、平凡反応 ($P : T=.00$ ($p<.05$) $Ps_{dep}=1.00$) が高い値を示した。

IV. 考察

以上の結果を踏まえ、主要なロ・テスト変数について学童期から青年期へ向かう変化の様相を考察する。今回は NT 群を対象とした小川・松本 (2005) や青年期を対象とした辻井・内田 (1999) との統計手法による縦断的な比較を行うことは難しいが、それぞれの群の特徴を見出す意味において今回得られた結果との違いを検討することは一定の意味をもつものと思われる。

1. AD/HD 群について

AD/HD 群に関しては、形態水準において有意差が見られた。NT 群を対象とした大野 (1984) や小川・松本 (2005) も成長とともに形態水準の増加を指摘している。今回の AD/HD 群でも形態水準を示す 3 つの指数が増加しており、片口法で言うところの自分の知覚をコントロールする能力や批判的な能力が成長とともに備わってきている可能性が考えられる。しかし、今回の結果で有意差はみられなかったが AD/HD 群の全体的な方向性として反応時間の減少や形態反応の多さなどの特徴もみられ、今後さらなる追跡調査が必要であると思われる。

2. ASD 群について

ASD 群に関しては、全体反応が有意に増加し、部分反応が有意に減少しており、形態水準では pre-post 間に有意な変化はみられない。把握型の変化について大野 (1984) は、学童期以前に見られた全体反応は、学童期から青年期へ向かう変化の中で、再び部分反応が減少し全体反応が増加することを指摘している。この

ような未分化な全体知覚から優れた部分知覚と共に正確な全体知覚を持つまでの経過、つまり把握型と形態水準の変化を Meili-Dworetzki (1956) はピアジェ (Piaget, J) の発達理論を元にして①原始的・全体的知覚、②分析的知覚 (部分知覚)、③優れた全体的知覚と分類している。PDD の把握型の特徴について辻井・内田 (1999) は、特徴として全体反応の高さと部分反応の低さを挙げており、このことからすると、ASD 群の特徴として優良な形態水準を伴わない①原始的・全体的知覚をベースにしながら把握型の変化が生じている可能性が考えられる。

3. ロ・テストにおける発達障碍児の縦断的研究について

以上、主要なロ・テスト変数について学童期から青年期へ向かう変化の様相を概観した。AD/HD 群では形態水準など NT 群と同様に成長と共に変化していく値もみられたが、反応時間の減少や形態反応の多さ、ASD 群では形態水準を伴わない全体反応の多さと NT 群と比べて人間運動反応の伸びの停滞が明らかとなる一方で平凡反応は有意に増加しており、全体の印象として発達のアンバランスさが見え、このような変化は NT 群とは異なり発達障碍者が持つ独自の成長と言えるのではないかとと思われる。また、学童期の段階では AD/HD 群と ASD 群と曖昧だった境界は、把握型をはじめとして、成長に伴いロ・テスト上ではそれぞれの特徴が顕著になってきているものと考えられる。

最後に、本研究結果の妥当性の問題として、参加者数が少ないため結果に偏りが生じるのではないかとこの可能性があり、一般化に欠けるということも考慮すべき点である。本研究の結果はあくまでも参考資料とし、今後は参加者数を増やした上での更なる量的な再検討や個人内変化について質的アプローチによる検討が必要であると思われる。

付記

本論文作成にあたり、多大なお力添えを賜りましたみのうクリニック木村義則先生とご協力いただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

文献

片口安史 (1987). 改訂 新・心理診断法 金子書房
Ames, L. B.・Metraux, R. W.・Rodell, J. L. et al. (1974).
Child Rorschach responses developmental trends from 2 to

- 10 years. Brunner/Mazel, Inc. 村田正次・黒田健次 (訳) (1976). *ロールシャッハ児童心理学* 新曜社
- Meili-Dworetzki (1959). The Development of Perception in the Rorschach. Klopfer, B. *Developments in the Rorschach Technique Vol. II. Field of Application*. Harcourt, Brance & World, 105-176.
- 野沢栄司・清水晶子 (1969). 児童のロールシャッハ反応—各指標の年齢的推移を中心として— *ロールシャッハ研究*, 11, 189-206.
- 小川俊樹・松本真理子 (2005). 子どものロールシャッハ法 金子書房
- 大野愛子 (1984). ロールシャッハ反応の縦断的研究—児童期・青年期における量的変化心理学研究, 55, 3, 138-144.
- 小沢牧子・片口安史 (1970). 子どものロールシャッハ反応 日本文化科学社
- 天満翔・日高三喜夫 (2015). 発達障害児のロールシャッハ・テスト上の特徴 *ロールシャッハ法研究*, 19, 20-29.
- 辻井正次・内田裕之 (1999). 高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応 (1) —量的分析を中心に— *ロールシャッハ法研究*, 3, 12-23.
- 内田裕之・明翫光宜・辻井正次 (2012). 自閉症スペクトラム障害のコミュニケーションの問題について—ロールシャッハ・テスト質疑段階でのやりとりを通して— *ロールシャッハ法研究*, 16, 3-12.

Longitudinal study of Rorschach Responses to Developmental Disorders

SHO TENMA (*Kurume University Comparison Culture Research Institute*)

MIKIO HIDAKA (*Kurume University Faculty of Literature*)

Abstract

This study examined the developmental changes of Rorschach responses to developmental disorders in childhood and adolescence. There were 15 participants, diagnosed with AD/HD 8 people and ASD 7 people whose findings were documented for two different periods: childhood and adolescence. Participants in the pre-data (Tenma and Hidaka, 2015) averaged 10.07 years in age ($SD = 2.05$), whereas the corresponding figures were 12.93 years ($SD = 2.19$) for this study. The pre-data and the study data were examined by the Wilcoxon signed rank test. Against the pre-data, the study participants in the AD/HD group showed higher $\Sigma F+$ %, and $R+$ %. The ASD group showed higher W %, P , and lower D %.

Keywords: Developmental disorders, Longitudinal study, adolescence